The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Effectiveness of a Parent Training Programme for Parents of Adolescents with Autism Spectrum Disorders: Aiming to Improve Daily Living Skills
Author(s)	Matsumura, Nanako
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　松村　菜々子　）	
論文題名	Effectiveness of a Parent Training Programme for Parents of Adolescents with Autism Spectrum Disorders: Aiming to Improve Daily Living Skills （思春期の自閉スペクトラム症の子どもの親を対象としたペアレントトレーニングの有効性の検討：日常生活スキルの向上を目指して）

論文内容の要旨

［背景と目的］

自閉スペクトラム症(以下、ASD)の子どもは日常生活スキルの獲得に障害があることが課題である。更に、ASDの子どもの親は定型発達の子どもの親と比べ、子育てに高いストレスを感じている[Hayes et al., 2013; Smith et al., 2010]。例えば、高校卒業後もホームケア、交通機関の利用、金銭管理，セルフケアなどの日常生活の管理を親が行う必要があるとの報告がある[Chiang et al., 2017]。以上のことから、ASDの子どもの日常生活スキルを向上させる支援が求められる。ASDの子どもの親支援にペアレントトレーニングがあり、子どもの適応行動(コミュニケーションや日常生活スキル)の増加、親のストレスの低減、親子関係の改善効果が報告されている［Okuno et al., 2011; Kubo et al., 2013; Black et al., 2018]。ただし、効果は低年齢(10歳以下)の子どもの親では報告されているが、それ以上の年齢では限定的である[Deb et al., 2020]。日本では、発達障害の思春期の子どもの親を対象にペアレントトレーニングが実施されている［Matsuo et al., 2015]。しかし、日常生活スキルの獲得に特化したペアレントトレーニングの効果は検討されていない。本研究では、思春期のASDの子どもの親を対象に、日常生活スキルの獲得に特化したペアレントトレーニングの有効性を検証することを目的とした。

［方法］

対象は10歳－15歳のASDの子どもの親(25名)であった。治療群13名、対照群12名に割り付けた。治療群に対する介入として、6回のペアレントトレーニングを実施した。セッションは以下の内容を含んだものであった：①行動観察と特性理解、日常生活スキルについて、②行動へのよい注目の仕方、③従いやすい指示、④トークンシステム、日常生活スキルの支援グッズ作成、⑤不適切な行動を無視する方法、限界設定とタイムアウト、標的行動のフィードバック、⑥標的行動について学校との連携方法、まとめ。各回90分、2週間に１回の頻度で実施し期間は約3ヵ月間であった。以下の三側面について評価を行った。①子どもの変化：日常生活スキルについて、Vineland-II適応行動尺度の日常生活スキル得点、家庭で実践した日常生活スキルの達成度合いを評価した。その他に、子どもの行動チェックリスト、対人応答性尺度を用いた。②親の変化：家族の自信度、PSI子育てストレスインデックス、Beck抑うつ質問票、参加の感想を自由回答で求めた。③親子関係の変化：TK式診断的新親子関係検査を用いた。介入の効果を共分散分析を用いて検討した。

［結果］

解析対象は治療群12名、対照群10名であった。①子どもの変化では、Vineland-Ⅱ適応行動尺度の日常生活スキル得点は介入による有意な改善は示さなかったが、家庭で実践した日常生活スキルの達成率は75.0%であった。Vineland-Ⅱ適応行動尺度のコミュニケーション得点は、介入による有意な改善が示された[$F(1,19)=5.43$, $P=0.03$, $Partial\eta^2=0.22$）。子どもの行動チェックリスト、対人応答性尺度の有意な改善は示されなかった。②親の変化では、家族の自信度の一項目(一日一回以上子どもをほめる)のみ介入による有意な改善が示された[$F(1,19)=4.70$, $P=0.04$, $Partial\eta^2=0.20$]。その他の質問紙では介入による有意な改善は示されなかった。③親子関係の変化では、母親回答の不満項目のみ介入による有意な悪化が示された[$F(1,19)=6.41$, $P=0.02$, $Partial\eta^2=0.25$]。その他の項目では介入による有意な変化は示されなかった。

［結論］

Vineland-II適応行動尺度の日常生活スキル得点の有意な改善は示されなかったが、コミュニケーション得点は有意な改善が示され適応行動の一部に有効であることが示唆された。また、子どもを褒める行動の有意な改善が示された。日常生活スキル獲得について有効性は確認できなかったが、思春期ASDの子どもにおけるペアレントトレーニングの有用性が示唆された。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（松村　菜々子）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	清水　栄司
	副 査	教授	小林　宏明
	副 査	講師	浦尾　悠子

論文審査の結果の要旨

本研究の内容は以下のような内容であった。

自閉スペクトラム症(以下、ASD)の子どもは日常生活スキルの獲得に障害があることが課題である。更に、ASDの子どもの親は定型発達の子どもの親と比べ、子育てに高いストレスを感じている[Hayes et al., 2013; Smith et al., 2010]。ASDの子どもの親支援にペアレントトレーニングがあり、子どもの適応行動(コミュニケーションや日常生活スキル)の増加、親のストレスの低減、親子関係の改善効果が報告されている [Okuno et al., 2011; Kubo et al., 2013; Black et al., 2018]。ただし、効果は低年齢(10歳以下)の子どもの親では報告されているが、それ以上の年齢では限定的である[Deb et al., 2020]。日本では、発達障害の思春期の子どもの親を対象にペアレントトレーニングが実施されているが [Matsuo et al., 2015]、日常生活スキルの獲得に特化したペアレントトレーニングの効果は検討されていない。本研究では、思春期のASDの子どもの親を対象に、日常生活スキルの獲得に特化したペアレントトレーニングの有効性を検証することを目的とした。

対象は10歳－15歳のASDの子どもの親(25名)であった。治療群13名、対照群12名に割り付けた。治療群に対する介入として、6回のペアレントトレーニングを実施した。各回90分、2週間に１回の頻度で実施し期間は約3ヵ月間であった。以下の三側面について評価を行った。①子どもの変化：日常生活スキルについて、Vineland-II適応行動尺度の日常生活スキル得点、家庭で実践した日常生活スキルの達成度合いを評価した。その他に、子どもの行動チェックリスト、対人応答性尺度を用いた。②親の変化：家族の自信度、PSI子育てストレスインデックス、Beck抑うつ質問票、参加の感想を自由回答で求めた。③親子関係の変化：TK式診断的新親子関係検査を用いた。介入の効果を共分散分析を用いて検討した。解析対象は治療群12名、対照群10名であった。①子どもの変化では、Vineland-Ⅱ適応行動尺度の日常生活スキル得点は介入による有意な改善は示さなかった。一方、家庭で実践した日常生活スキルの達成率は75.0%であった。Vineland-Ⅱ適応行動尺度のコミュニケーション得点は、介入による有意な改善が示された[$F(1,19)=5.43$, $P=0.03$, $Partial\ \eta^2=0.22$) 。子どもの行動チェックリスト、対人応答性尺度の有意な改善は示されなかった。②親の変化では、家族の自信度の一項目(一日一回以上子どもをほめる)のみ介入による有意な改善が示された[$F(1,19)=4.70$, $P=0.04$, $Partial\ \eta^2=0.20$]。その他の質問紙では介入による有意な改善は示されなかった。③親子関係の変化では、母親回答の不満項目のみ介入による有意な悪化が示された[$F(1,19)=6.41$, $P=0.02$, $Partial\ \eta^2=0.25$]。その他の項目では介入による有意な変化は示されなかった。

Vineland-II適応行動尺度の日常生活スキル得点の有意な改善は示されなかったが、コミュニケーション得点は有意な改善が示され、適応行動の一部に有効であることが示唆された。また、子どもを褒める行動の有意な改善が示された。思春期ASDの子どもにおけるペアレントトレーニングの有用性に関する将来的な研究の方向性が示唆された。

本論文に対する評価

思春期のASDの子どもの親を対象に、日常生活スキルの獲得に特化したペアレントトレーニングの有効性を検証した。治療群(IT)は対照群(DTC)と比べ、子どものVineland-Ⅱ適応行動尺度の日常生活スキル得点の有意な改善は示されなかったが、コミュニケーション得点の有意な改善、家族の自信度アンケートの親が子どもを褒める行動の有意な改善が示された。本邦で思春期ASDの日常生活スキル獲得に注目したペアレントトレーニングの比較検討による効果検証をした研究は初めてであり、学位授与に値する。